

要旨

目的：日本には産湯文化があり出生後すぐから沐浴が実施されてきた。現在では沐浴からドライテクニック（以下、DT）へと清潔ケアの方法が変わりつつあるが、ケアの方法は明確に定められておらず、施設によってさまざまな方法を取り入れている。本研究の目的は、早期新生児の清潔ケアに関して沐浴とその他の方法での実施、その後の新生児の状態に関する先行研究をレビューし、効果的な清潔ケアを明らかにすることである。この研究によって、日本における、統一して実施可能かつ効果的な清潔ケア方法を検討することができる。

方法：まず、新生児の清潔ケアに関する記載が含まれる新生児に関する各国のガイドラインを検索し、続いて PubMed、CINAHL Plus With full text、The Cochrane Library、EMBASE、MEDLINE、医学中央雑誌 Web を用いて国内外（英文・和文）の一次文献及び二次文献の検索を行い、抽出された文献の批判的吟味を行った。

結果：ガイドラインは 6 件(日本、アメリカ、イギリス、オーストラリア)抽出され、清潔ケアに関するものが記述されていたが、国によって異なる方法を推奨しており、統一した見解はなかった。システマティックレビューは 3 件抽出され、2005 年の研究ではレビュー基準をみたす研究はないという結果であったが、2012 年、2018 年の研究では洗浄と入浴に関して 10 件の RCT を含む 18 件の研究結果が統合されていた。その内メタアナリシスされていたのは 3 件で洗浄剤の使用の有無によって皮膚バリア機能に有意差がないことがわかった。また、児の快適さに関しては沐浴の方が DT より優れているが、その他のアウトカムでは有意差はなかった。一次文献のレビュー対象として抽出した RCT 3 件のうち英文献は 2 件、和文献 1 件で対象国はエジプトと日本であった。日本で行われた 2 件の研究は沐浴と DT、毎日の沐浴と 2 日に 1 回の沐浴を比較しており、エジプトの研究ではケア実施の有無を比較していた。アウトカムとして皮膚の状態や体重、体温、におい、黄疸値、母乳回数、感染をおいているものがあつた。沐浴と DT の比較に関しては 1 つの研究で生後 3 か月時点の TEWL と SCH に有意差が認められた。また、生後 1 か月時点でおむつ性皮膚炎を患う児の割合に有意差が認められた。ケアの有無からは生後 3・4 週目の紅斑の発生率と、感染率に有意差が生じ、さらにおむつ性皮膚炎の発現率も有意差が生じた。また 3 件の RCT はがあり、サンプル数が少ない、介入方法が一定でない上に介入の要素が複数存在する等のバイアスリスクが存在する可能性あつた。

結論：沐浴と DT はどちらのケアも悪影響はなく、選択は個人にゆだねて問題ないことが示された。また、新生児の洗浄は水のみでも十分であることが示唆された。新生児に対してポジティブに作用するであろう介入を特定するために、入浴の有無や回数、方法だけではなく、新生児の保湿も含めてスキンケアについて幅広く検証していくことが必要である。